

本寄稿でもっとも着目されるのは、1917年のロシア革命は「世界史の一大転換点」となったが、「ロシアの人々には幸福と正義をもたらさなかった」とのべる箇所だろう（連載第4回）。もうひとつ、ロシア100年を分析する切り口もなるほどと思わせる。巨大な政治的実験つづきで、しかもどれひとつ継承性・連続性がなかったという（第4回）。

本稿には、他の論客にはあまり類例のない、独特の指摘があるので4点ほど指摘しておきたい。

ひとつは、10月革命と第1次大戦との関係である。本稿は2月革命で成立したロシア臨時政府が、もしも戦争離脱と和平交渉を決断していたら、革命運動は引き潮に転じていたとみる。革命運動の先鋭化には、農民の大規模な招集による農産物減産と、食糧調達困難による首都の飢餓があったという見方である（第1回）。

次はレーニンの「4月テーゼ」、つまり、ブルジョア民主革命をプロレタリアートと農民が権力を握る社会主義革命に転化させる、というレーニンの革命路線は、「マルクス主義の基本前提」に矛盾するという指摘である。社会主義とは資本主義の発展の上に展望するものであり、当時のロシアはその条件と矛盾するというものだ。

三つ目に、スターリン治世期の富農撲滅闘争と農業集団化と突撃的な工業建設は、懲罰機関NKVD（内務人民委員部）による大粛清と相互に関連し合っており、戦後復興のための独・日戦時捕虜の抑留・懲役はその一環だったこと、そして、予想外に早かった原水爆の開発も「原子力収容所=Atomic Gulag」に負っていたという（第2回）。

本稿は、ノメンクラトゥラ（特権階級）分析の先駆、ジラス著『新しい階級』に着目、スターリン期やフルシチョフ期、エリツィン期にどのような特権階級が形成されたかを対照する（第3回）。エリツィン期を、オリガルヒ（寡占政商）が国有財産を私物化した資本主義と特徴づける一方、プーチン期を、天然資源や国防分野で再編復活した国有企業が主導する資本主義の形成とみて、現ロシアを「統治するエリート」が牽引し、「中産階級」が支配する社会と性格づける（第4回）。ただしロシアは、17の自治共和国を含む85地域を擁するという、世界一錯綜した国であり、大統領の強大な権限も、ロシアの欠陥というより、必要によるもの、と見なしている。

当論文の異稿全文を、キエフの週刊誌『2000』が掲載している。筆者の了解を得て本誌では抄訳としているが、本誌読者のために原文の一部、手を加えている。原題は「ОТ ВЛАДИМИРА ЛЕНИНА К ВЛАДИМИРУ ПУТИНУ: К 100-летию Октябрьской Революции в России」

## 解説

1917年のロシア「10月革命」から100年を迎える。92歳になる「異論派」知識人のメドヴェージェフ兄弟は、節目となる今秋、「10月革命」は「世界史の一大転換点だった」が「ロシアの人々には幸福と正義をもたらさなかった」とする論文を発表した。革命以降の政治的実験を淡々と描きつつ、重要な論点を提起するこの論文の抄訳を、4回にわけ掲載する。

## 1917年までのロシア

1914年のロシアの人口は約1.7億人で、合衆国の約1億人を上回っていた。国民総所得は米・独・英につづく4位で、5位が仏、6位が伊、7位、オーストリア・ハンガリー二重帝国（以下、奥匈国）、8位が日本。1人当たりでは概ね欧州諸国以下だったが、日本より上だった。英・仏・蘭などの豊かさはかなりの程度、海外植民地からの収奪に負っていた。欧州の工業発展を主導したドイツは後発「帝国」として海外市場の再分

割を志向。日本とロシアは20世紀最初の大戦である露日戦争を戦った。日本は日英同盟を結び、ロシアはフランスと提携した。20世紀初頭のロシアはまだ農業国であり、農民層の圧倒的多数は土地を共有する村落共同体（ミール）に統合されていた。数百年間、厳しい気候条件下で村落の形成を可能としてきたこの制度が、露日戦争後のストルイビン改革で解体された。ストルイビンは土地私有制を導入し、農家が共同体を離脱し、自営農場を設立する（独立自営農民になる）のを許容した。改革は農業の生産性を引きあげ始めた。

## ロイ・メドヴェージェフ

1925年、トビリシ（ジョージア）生まれ。レニングラード大学卒業。教育学博士。代表作『歴史の審判に向けて』（現代思潮新社）、『10月革命』（未來社）、『1917年のロシア革命』（現代思潮新社）、ジョレスとの共著『知られざるスターリン』（現代思潮新社）など多数。

## ジョレス・メドヴェージェフ

1925年、トビリシ（ジョージア）生まれ。チミラーゼフ農科大学卒業。生物学博士。代表作『ウラルの核惨事』（現代思潮新社）、『生物学と個人崇拜—ルイセンコの興亡』（現代思潮新社〔近刊〕）、『ソヴィエト農業』（北大図書刊行会）、『知られざるスターリン』（現代思潮新社）など多数。

## Рой Медведев

左がロイ、右がジョレス。  
（提供/本人）

## Жорес Медведев



第1次大戦とペトログラードの飢餓◆世界史上最大のロシア軍は、コサックを除く9割方が軍事教練の乏しい農民兵であり、右の表1のように莫大な損傷を被った。未曽有の農民兵の動員、延びた前線、急拡大した軍需産業が農業生産に押し掛けた。農業先進地であるポーランド、西ウクライナ、バルト地方の喪失が帝国全体の食糧供給をさらに制約した。数百万頭もの農耕馬の一戦時動員も農業生産性を低下させた。最も深刻な問題は、鉄道網が食糧農産物の調達増に対処できなかったことだ。食糧不足は、農産物と交換しうる、燃料や衣料などの商品不足から一段と悪化した。諸物価が際限なく高騰する一方、政府が食糧調達価格の値上げを拒んだため、農民が政府の固定価格で農産物売るのを躊躇した。配給制を実施するとパンを求める長蛇の列が日常化した。首都に食糧供給していた鉄道は、自らも大消費都市であるモスクワと結ぶた一本。2月革命は、「食糧を供

	第1次大戦			第2次大戦			
	総兵力	戦死兵	傷病兵	総兵力	戦死兵	傷病兵	
米	436	13	23	1,236	41	67	
英	890	111	209	509	35.4	28	
仏	841	138	427	700	16.6	39	
帝政ロシア	1,200	170 (360)	495	1,250	1,360	500	
伊	562	65	95	中国	500	132	176
日	80	0.49	0.09	日	826	230	30
独	1,100	205	425	独	1,000	553	600
奥・洪	780	120	362	伊	450	38.9	12

注：①総兵力は最大動員時。②戦死兵（ ）は作成者。③第1次大戦の日本戦死兵は靖国神社合祀者数。資料：R.Goralski(1981), S.Everrett(1980)など。帝政ロシアはF.G., Krivosheev(2001)。作成/佐々木洋(2017)

注釈  
異論派◆1960年代後半にディンデンツェフと異論派と呼ばれるグループの活動が広まった。代表的存在がソルジェニーツィンとサハロフとメドヴェージェフ兄弟である。異論派の活動とは、「雪どけ」と民主化の動きを逆転させるブレジネフ反動期に、科学や文学や通信の自由のためにたたかった多様な知識人の活動のことである。

14年8月に勃発した墺洪国およびドイツとの大戦にロシアが参戦したのは、同盟国セルビアとの盟約に従ったものだ。墺洪国が同年7月にセルビアに宣戦を布告、ベオグラードを砲撃した。当時のロシア軍の規模は欧州最大だった。16年末までに360万が戦死、200万以上が捕虜となり、数百万が負傷。敗戦と独逸軍によるロシア領ポーランド、ウクライナ、バルト沿岸地方の占領により、首都ペトログラードばかりか、お

## 2月革命

暴落したルーブルで穀物を買うのを拒んだ。

2月23日(ロシア暦、後日導入のグレゴリオ暦以下、《グ》と表記、で3月8日、国際女性デー)に始まったペトログラード労働者のストライキが数百の工場に広がり、労働者地区では路上にバリケードが現れた。数日のうちに首都の守備隊の多くが労働者側に立ち始めた。当時の出来事には、1日単位だけでなく、1時間ごとの詳しい記録も残されている。

3月1日(《グ》14日)にロシア臨時政府が設立された。3月2日(《グ》15日)の皇帝ニコライ2世退位の署名とその公表は全ロシアくまなく歓喜で迎えられた。まさにこの臨時政府

が、わが国の死刑廃止、憲兵隊本部の解体、全市民の平等の権利、貴族の特権廃止、官吏と軍人の「14等級の文武官屋敷表」の廃止、政治犯や亡命者などの恩赦という、一大改革を実施したのだ。もしもこの新政府が戦争離脱と、ドイツ・墺洪国との和平交渉を決断していたら、革命運動も引き潮に向かっていったに相違ない。だがそうならなかった。ロシア軍が崩壊していったのに、ロシア臨時政府は主として仏・英連合国の圧力のもとで「戦勝目的」の戦争継続の方針をとった。前線で攻撃に出たが、無惨な敗北に終わった。

第二の決定的難題は財政問題だった。ロシアは君主制崩壊には堪えぬことができた。しかし、「ツァーリ(皇帝)の肖像入りルーブル」の崩壊には堪えられなかった。戦前のロシアでは皇帝の肖像は紙幣だけに刻印されたのではない。ルーブル金貨もコペイカ銀貨も、コペイカ銅貨も刻印されていた。流通する金貨と銀貨の存在が、確実に紙幣の流通を保証しており、最高額紙幣はピョートル大帝を描く500ルーブル札だった。戦争

上/農具の鋤で武装した小作農、農場労働者たち。下/パンを買うためにパン屋の前に列を作るペトログラードの人たち。(1917年、提供/SPUTNIK・時事)

異論派「兄弟が見たレーニンからプーチンまで」

# 10月革命はロシアの人々に幸福をもたさなかった

翻訳・解説・注釈/佐々木洋

第1回

給できない政府」に対する自然発生的な反乱の結果であった。そして、10月革命で権力を握った新政府も同じく、都市労働者向けの「食糧を供給できず」、武力行使を厭わずに農民から食糧を調達する「戦時共產主義」に突入していく。

首都の守備隊 ◆ペテルブルグ軍管区が首都の治安維持にあたっていた。しかし開戦とともにその精鋭部隊は前線に移動し、各部隊の新兵訓練のための予備部隊が残された。2月23日には警察の治安維持の全権が軍に移管された。27日朝、近衛歩兵連隊ヴォルニニ部隊で反乱が始まり28日夕刻には首都守備隊のほぼ全体が革命側についた。

ニコライ2世 ◆ロマノフ朝最後の第14代皇帝(在位1894年11月～1917年3月15日)。独皇帝ウィルヘルム2世や英国王ジョージ5世の従弟。18年7月ウラルのエカテリンブルク(2025年国際万博開催地に立候補)で一家ともども虐殺される。

死刑廃止 ◆国内戦が始まると、革命遂行のため司法人民委員部の決定により18年、死刑が復活された。

仏・英連合国の圧力 ◆開戦時「クリスマスまでに終わる」と楽観視された第1次大戦は、損傷の激しい塹壕戦の膠着と海上封鎖の影響などで、どの参戦国も4年に及ぶ総力戦で疲弊した。仏・ベルギー領内に構築された西部戦線の塹壕線と独軍と対峙する仏英軍にとり、東部戦線からの帝政ロシア軍の戦線離脱は、膠着する塹壕戦の均衡を独軍側に傾ける恐れがあった。漁夫の利を得たのが日本である。欧州列強が不在になったアジア市場を日本が席卷することで長期の大戦景気を謳歌するとともに、日本軍は、中国のドイツ租借地を攻略、太平洋の多数のドイツ領諸島を占領した。

ペトログラード労働者・兵士代表ソヴィエト ◆首都で組織されたソヴィエト。全ロシアで1万の市と村で設立されたソヴィエトのひとつ。

エスエル党 ◆エスエル党は、ナロードニキの流れを汲み、地主地の没収を望む農民が支持。10月革命後の憲法制定会議選挙で過半数を占め第1党となったが、ボリシェヴィキを支持する左派と右派に分裂。

トロツキー(1879～1940) ◆10月革命のレーニンに次ぐ指導者の一人。赤軍の創設者。1940年に亡命先のメキシコでスターリンの刺客に暗殺された。

西部戦線 ◆長期の総力戦下に一般市民への統制が強



に伴うインフレで15年以降、金・銀のみが銅貨まで退蔵され、流通から消えた。硬貨鑄造が止まった。政府は遮二無二に紙幣だけ刷った。2月革命後、旧紙幣に代替したのが平民「ケレンスキー（首相名）紙幣」と呼ばれた新紙幣。紙質は粗悪で、番号も署名もない。新紙幣は政府が農村で穀物専売令により、都市向け食糧を固定価格で徴発するのを可能にしたが、通常の売買に使うのは困難だった。秋の寒波とともに、再び飢餓が首都の主要問題となった。鉄道8本が結ぶモスクワは物々交換のお蔭で持ち堪えることができた。

## 10月革命

10月革命——臨時政府の転覆と、首都の権力のペトログラード労働者・兵士代表ソヴィエト（ソヴィエトは「会議」の意）革命軍事委員会への移行——は無血革命だった。10月25日（《グ》11月7日）深夜、ボリシエヴィキとエスエル（社会革命党）左派が多数を占めた、第2回全ロシア労働者・兵士代表ソヴィエト大会は、権力が、ペトログラードと全ロシアのソヴィエトに移行したと宣言した。同大会は、「平和の布告」だけでなく、おもに地主の所有物の没収と農民への引き渡しを規定する「土地に関する布告」をも採択した。大会はロシアの新政府——ウラ

ジミール・レーニンを首班とする人民委員会（政府）——を樹立した。この政府の成員には外務人民委員（人民委員は後に大臣と名称変更）のL・D・トロツキーや、民族問題人民委員のI・V・スターリンも含まれていた。

ドイツとのブレスト・リトフスク講和条約が18年3月初めに、独軍の攻勢の成功後、実質的にはロシアの降伏後に調印され、その結果、ウクライナを含む膨大な西方領土を失った。だが、ブレスト講和は西部戦線でのドイツと奥洪国の降伏後の18年11月に無効となる。

## 国内戦

10月革命からわずか1年後にロシアで国内戦争が始まった。この国内戦の原因と結果の解釈には多くの諸説がある。肝要なのは、ボリシエヴィキと労働赤軍がこの長い戦争で勝利をおさめ、いくつもの部分に分解したロシアを統合し、それを新たな連邦国であるソヴィエト社会主義共和国連邦に連結させたという争う余地のない事実である。この国内戦の勝利を可能とするのに重要な役割を果たしたのが、ロシア共産党（ボ）（ボ）はボリシエヴィキの略「第10回党大会で発表された「戦時共産主義」政策に取って替わる、ネップ＝新経済政策だった。



## 新経済政策＝ネップ

21年のロシア経済は「破滅」の一語に特徴づけられる。ボリシエヴィキが統治するロシア領は、ロシア帝国からフィンランドとバルト3国、ポーランド、ベッサラビアが離脱したため、減少した。ポーランドには同国軍が占領する白ロシアとウクライナの西部地域が含まれていた。古来のロシア住民が、国内戦と飢饉と疫病による損失と亡命によりかなり減少した。ソ連邦の大まかな推定では22年の人口は約1億3000万人だった。

ネップ導入が経済の混乱から国を救った。新しい法律が私的な企業活動と商業を許した。農

右／冬宮攻略後、略奪したトラックに乗るボリシエヴィキ軍の兵士。左／変装したレーニン。フィンランドに亡命するために作成した身分証明書用の写真。（1917年、提供／SPUTNIK・時事）

まり、海上封鎖により植民地からの物資を絶たれた同盟諸国は疲弊した。1918年にはオスマン帝国と塙で革命がおこり、二重帝国が瓦解、独でも11月にキール軍港で水兵反乱がおきた。独軍はブレスト講和により、東部戦線から西部戦線へ部隊を転進させることができたが、西部戦線は新たに強力な連合国軍＝アメリカ軍が参戦した。水兵反乱の直後、独皇帝ヴィルヘルム2世が退位、大戦が終結、休戦が成立した。

労働赤軍 ◆10月革命後の18年1月、レーニン首班の人民委員会（政府）が、2月革命後にできた武装労働者の民兵部隊＝赤衛軍（10月革命時の兵員は2万）をもとに「労働者・農民赤軍（労働赤軍）」の設立を布告。2月に首都ペトログラードに侵攻する独軍に赤軍が抵抗した。敗北ブレスト講和に調印後、ボリシエヴィキ政権は外務人民委員を辞任し、軍事人民委員・最高軍事会議（9月以降は共和国革命軍事会議）議長に就任したトロツキーのもとで赤軍の再編成に着手した。同議長に、当時レーニンと並ぶ権威を享受するトロツキーが就いたことは、軍の再編がボリシエヴィキ政権にとり、最優先課題であり組んだ外に印象づけた。トロツキーが最初に取る組んだのは、ドイツ正規軍と交戦可能な軍隊を再建することだった。

分解したロシアの統合 ◆第一次大戦の結果、ポーランドとバルト諸国がロシア帝国から離脱した。国内戦が終息に向かうと、ロシア共産党の手で各地のソヴィエト政権と統合が進行し、1922年に第1回全連邦ソヴィエト大会が開催され、ロシア連邦共和国、ウクライナ社会主義ソヴィエト共和国、白ロシア社会主義ソヴィエト共和国、ザカフカス連邦の4国が平等な立場で加盟するソヴィエト社会主義共和国連邦の樹立を宣言した。その後36年にザカフカス連邦のグルジア、アルメニア、アゼルバイジャン3国はソヴィエト連邦の直接の構成共和国となる。

ベッサラビア ◆1806年の露土戦争の結果、ルーマニア人のモルダビア公国領を、当時宗主権を持っていたオスマン帝国がロシア帝国に一部割譲した際に、割譲された公国東部地方をロシア側が指していった名称。現在のモルドバ。

コンセッション ◆1920年代を通じ、独・英・米・仏・日の企業によるコンセッション事業が展開がみられたが、その成果は期待したほどではなかったとみられている。そこにはソ連国機関の官僚主義、厳しい外資規制、自由な雇用への制限、自社製品の国内外への直接販売の禁止などという、ソ連特有の制約も絡んでいったようだ。コンセッションの事例に日本資本の

業に破滅的な食糧徴発（戦時共産主義）期の強制的な食糧徴発）が、農業生産を刺激するタイプの食糧税に代わった。市場関係の発展は金融の改革から、流通への金兌換の「チエルヴォー」ネットワーク（金兌換時代の日銀券に相当）と、ルーブル銀貨および50コペイカ銀貨の鑄貨導入から始まった。地下資源鉱業の事業所と製造工場を外国資本に賃貸するコンセッション（特定の地理的ないし事業範囲における独占的営業権の譲渡）が許された。通貨の安定につれ銀行の機能も徐々に回復してきた。経済が急速に発展し、28年の国民所得の成長率は18%だった。慢性的な経済危機にあった西欧諸国、とくに失業とハイパーインフレにあえぐドイツの状態に比べ、28年のソ連の成果は際立った。

## ウラジミール・レーニン

レーニンは10月革命の指導者かつ組織者だった。亡命先からペトログラードに戻ると、彼は『ブラウダ』に有名な「4月テーゼ」を発表、ブルジョア民主革命が社会主義革命に転化するのには必須であり、「その過程で権力をプロレタリアと貧農の手に渡すべきである」ことを根拠づけた。この政綱はマルクス主義の基本的前提と矛盾する新教義だった。戦争と食糧危機が続く

条件にありながら、しかし、何はさておき、このペトログラードで革命が成功する見込みがある、というものだった。

ところが10月革命は首都の危機的食糧事情を変えなかった。ドイツ軍はペトログラード攻撃を再開、ナルヴァとアスコフ（侵入路のエストニア国境沿いにある古都二つ）を脅威に晒した。フィンランドは独立を通告、カレリア地峡南部の対ロシア国境線をペトログラードから僅か30キロメートルに引いた。

冬季は首都への食糧供給が妨げられ、住民の配給は1日120〜200グラム（小麦粉）に減った。州と銀行、郵便電信の従業員は、現金給与の欠配で働くのを拒んだ。歴史的な解決策として、人民委員会議は、18年3月13日ロシア共和国の首都を秘密裏に遷都した。モスクワのクレムリンがソヴィエト政府の所在地となった。

だが、レーニン本人は安全を怠り、時折工場の集会に車で運転手しか連れずに出かけた。18年8月、エスエル女性党員カプランの暗殺未遂でレーニンが重傷を負った。彼は10月末までには回復し、仕事と演説を再開した。

レーニンは独裁者でなく、指導者だった。存在したのは「ボリシエヴィキ党の独裁」で、実際は中央委員会と政治局の独裁

だった。

彼の重要な国際的影響のなかに、19年3月の共産主義インタナショナル（コミンテルン）の創設がある。英国や中国、日本などの共産党はレーニン存命中に創設され、コミンテルンに加盟した。しかし、レーニン自身の健康は悪化した。脳の血液循環を損なう恐れがあるため、首から弾丸を取り除く手術は行なわれなかった。レーニンが自分の執務室で仕事をしたのは22年12月12日が最後だった。

余命幾何もないと察知したレーニンは、口述筆記させた「大会への手紙」のなかで、自分に最も近い同僚6名、スターリンとトロツキー、ジノビエフ、カール・メネフ、ブハーリン、ピヤタコフの肯定的、否定的な資質を指摘する短い評価を与え、次期の党大会で新たな党指導者を選ぶよう提起していた。

ささき よう・札幌学院大学名誉教授。主な訳書に『ウォルマートはなぜ、世界最強企業になったのか』金曜日、『ソヴィエト農業』北大図書刊行会。刊行中の『ジョレス・メドヴェージェフ、ロイ・メドヴェージェフ選集』全3巻4冊、現代思潮新社の解題・監修を担当。

## 「異論派」兄弟が見たレーニンからプーチンまで

# 10月革命はロシアの人々に幸福をもたらさなかった

第1回

「北樺太石油会社」による石油生産がある。「4月テーゼ」の矛盾 ◆レーニンが亡命先から帰還後に発表した「4月テーゼ」は、①革命の現状が、権力をブルジョアジーに与えた第一段階のブルジョア民主革命から、権力を労働者と貧農に引き渡すべき第二段階への過渡期にあること。②目標は議会制民主主義ではなく労働者・貧農・農民代表ソヴィエトにある。社会主義を即刻導入できないとして、ソヴィエトはまず「社会的な生産と分配」を統制すべきだ、というものだった。本稿は、このテーゼの見地はマルクス主義の基本的前提に反すると指摘する。たしかにマルクスは、『経済学批判』の序言の一部でこう述べている。「社会の物質的生産諸力は、その発展がある段階に達すると、いまだそれがそのなかで動いてきた既存の生産諸関係、あるいはその法的表現にすぎない所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏へと変する。このとき社会革命の時期がはじまるのである」。

暗殺未遂 ◆逮捕された彼女は「ボリシエヴィキの憲法制定会議解散」が動機と語り、9月初め裁判もななく銃殺。彼女は失明同然、所持する拳銃と摘出した弾丸の不一致からも真犯人は別の可能性が高い。ボリシエヴィキは赤色テロ、多くの政敵殺害に出た。

日本共産党 ◆共産主義インタナショナル日本支部 ◆1943年のコミンテルン解散まで、各国共産党は、その支部として活動した。コミンテルンは22年6月に片山潜の参加のもとに、日本共産党綱領草案の起草をすすめる。同党は同年11月開催のコミンテルン第4回大会に、高瀬清、川内唯彦を派遣、日本共産党の成立（同年7月）を報告し、日本支部として認められた。

ジノビエフ (1883~1966) ◆レーニンの側近としてロシア革命に参加。コミンテルン議長などを歴任したが、スターリンとの権力闘争に敗れ、銃殺される。カール・メネフ (1883~1936) ◆第2回全露ソヴィエト大会議長、全露中央執行委員会議長などを歴任したが、スターリンとの権力闘争に敗れ、銃殺される。ブハーリン (1888~1938) ◆ボリシエヴィキ有数の理論家。1935年「スターリン憲法」の起草者。レーニン死後スターリンに協力するが、右派として失脚、1938年に銃殺。

ピヤタコフ (1890~1967) ◆レーニンの遺書で若手世代を代表する人物としてブハーリンとともに評された。1928年に自己批判して復党を許されたが、37年に銃殺された。